

# 「被虐待児童の衝動分析と治療的対応について」(上)

—ソンディ・テスト反応を中心として—

奥野哲也

〔抄録〕

社会崩壊の危機を背景にして、家庭の機能がうまく作用しないために虐待が増加している。その被虐待児童がどのような心的状況下で虐待を耐えているのか、虐待がどのような心の歪みを生じているのかを明らかにして、その治療的対応を考えようとするのがこの研究の目的である。被虐待児童にあまり心的負担をかけない投影法心理検査としてソンディ・テストを用いた。一般群や非行群とも比較検討した結果、被虐待児童は①幼児期からの心情の安定が不良である②不安や動揺が生じやすいが、それが抑圧され内在化しやすい③したがって自我像は自己抑制的、順応的傾向が目立っている④情愛対象への依存と離反の葛藤状態が目立つ、などの衝動像が出現した。いずれも被虐待児童の定まりにくい不安定な心情が明らかになった。特に(下)では、こうした結果が出現する具体的な事例の分析を通じて、ソンディ・テスト学的な側面からの治療的対応を明らかにする。

キーワード ソンディ・テスト、被虐待児童、治療的対応

## はじめに

最近では家庭の機能がうまく働かず、各成員を保護することができずに互いの存在が葛藤を生じるようになり、互いに傷つけ合う熾烈な場へと移行する状況になっている。例えば、親子間の殺人事犯は言うに及ばず、夫婦間、同胞間での残酷な事犯が発生しており、今後も増加することが危惧されている。これは社会における各構成組織のそれぞれが、自己の利潤のみを最優先するあまりに規範を軽視してはばからないようになったことに起因する。これは望ましい姿で社会が発展するのではなく、衰退してゆく危険性を如実に示しているのである。家庭は、こうした社会の衰退のあおりを直接的に受けており、家庭の問題が、次々に表出する状況下にある。強者が弱者を犠牲にして生きるのは単に原始社会だけではなく、社会が発展を遂げた現代も一層目立つ情勢なのである。こうした背景を持って虐待が増加することになっている。この

ように家族間の種々の葛藤が犯罪として表出することが多くなった最近の情勢を背景として、親族、特に最も身近な親から虐待を受ける児童数は年々増加している。被虐待児童は、警察庁統計によると、平成18年度上半期に警察が摘発した児童（18歳未満）虐待の件数は、前年同期比14.3%増の120件と、2000年以降過去最多に達している。その内訳は検挙人員131人（前年同期比12.9%増）、被害児童数128人（前年同期比18.5%増）で、虐待の結果、死亡した児童は28人（前年同期比27.3%増）と、前年同期より6人増えている。

虐待の内訳は、暴行や傷害などの「身体的虐待」が86件（前年同期比7.5%増）で、被害児童数は92人である。また「性的虐待」は23件（前年同期比4.5%増）で同24人、食事を与えなかったりする「怠慢・拒否（ネグレクト）」は11件（前年同期比11倍）で、同12人だった。

また直接的には児童虐待とは言えないが、児童買春と児童ポルノ事件の検挙件数は合わせて1,087件と、これも増加しており、今回初めて1,000件を超えている。そのうち小学生が被害者となった事件は全体で10,747件を数えており、7年連続で1万件を超えているという状況にあると新聞各紙は報じている。

児童虐待の件数が増加した要因のひとつに、2004年には国民の通告対象の範囲を拡大した改正児童虐待防止法が施行されており、「法改正を機に国民の虐待防止に対する意識が高まり、潜在化していた虐待が認知されるようになったのも摘発が増えた要因（警察庁）」（平成18年8月4日の日経新聞）との見方もあるとのことだが、これは多少楽観的な判断のように思えてならない。というのも、被虐待児童に関連する調査ではないが、非行少年やその保護者及び少年院教官に対する意識調査結果（平成17年版犯罪白書）が発表されているが、この調査結果からは、多くの問題を有する親が増えていることが危惧される状況がはっきりしている。つまり調査結果では、①指導力に問題がある保護者が増加したと認識している少年院教官が80%を越えていること。②その内容を問う設問では、「子どもの行動に対する責任感がない」とする点に問題があると認識している少年院教官が62.5%と最も多く、ついで「子どもの言いなりになっている」（50.2%）、「子どもの行動に無関心である」（49.1%）となっており、無責任な保護者や溺愛傾向の強い保護者が増えたとする比率が高いことを示していること。③「虐待がある」という保護者が増加したと認識している比率は36.1%であった。

こうした現状にあって、被虐待児童の心理的現状を把握し、その心理状態を分析する必要性に気づかされ、またそうした児童や家族や或いはこうした現場で対応を迫られる関係機関の職員に対して、どのような治療的対応が考えられるのかについてソシティ・テスト学的知見を中心に考察することにした。

## 1. 調査の目的

既に述べたように被虐待児童が増加している現代の現状にあって、そうした不幸な状況を改善するには、まずこうした児童の心理状態を把握すること、更にはそれを手がかりに治療の方策を考える必要がある。はじめに被虐待児童の心理状態の解明のためにソンディ・テストを実施してその結果を分析する。その後、その治療的対応の解明のために詳細なテスト分析の解明を行いテスト学的な治療的・教育的対応策を検討する。

## 2. 調査の方法

被虐待児童を対象にソンディ・テスト1回法を実施した。主に児童相談所や主に被虐待児童を保護する施設（情緒障害児短期治療施設）に収容中の児童に対してソンディ・テストを実施した。ソンディ・テストは1回法の施行は約5～10分程度の短時間で終り、被験者に対する心理的負担が少ない手法であることから、これを選んだ。ソンディ・テストの実施は個別1回法で、原則として入所数日以内に実施している。調査対象数は、調査期間（平成16年4月から平成18年3月）までに実施できた被虐待児童68名（年齢は満6歳から満17歳：平均満10歳）（男：38名、女30名）である。その詳細は、表1のとおりである。

表1 調査対象（年齢別・性別）

年齢	6歳	7	8	9	10	11	12	13	14	17	合計
男子	1	1	9	4	11	2	4	4	2	0	38
女子	2	6	4	5	2	1	1	3	5	1	30
合計	3	7	13	9	13	3	5	7	7	1	68

注) 15、16歳の対象者はなし

## 3. ソンディ・テストの実施結果と考察

### 1. S（性）衝動の反応結果

#### h因子の反応

反応出現率は表2以下のとおりである。特徴を明確にして、分かりやすくするために反応出現率数値20%以上多く出現する反応を因子反応型の特徴として中心に考え、特に30%以上の出現率を示す反応は最も特徴的な反応型として処理した。

表2  
前景像のh因子反応出現率（太字は出現率20%以上）

h因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
h +	47	<b>69.12</b>	<b>71.3</b>
h -	7	10.29	8.2
h 0	9	13.24	11.8
h ±	5	7.35	8.8
総数(人)	68	1%以上で有意	

すると以下ようになる。h 因子では h + 反応が最も多く、約69%と多発している(表2参照)。先行研究における一般群(1,450人)(巻末注)でも71%を越えている数値が得られている状況から考えると、h + 反応が多く出現して当然の反応と言えるし、被虐待児童における h 因子型は、一般の未成年者の反応と大差のない傾向を示していることが理解される。h 因子はエロス(生の本能)欲求を志向する衝動であり、エロスはギリシャ神話においては矢を用いて恋愛関係を発生させる神として有名であるが、より広い意味では、他者と他者を結びつける、すなわち情愛的関係を生み出すエネルギー(奥野哲也2004)なのである。その結果 h + 反応は、母性的要素に象徴された特定の個人への情愛を求める欲求(個人的情愛欲求)であると解釈されている。したがってこの反応が多発する意義は、「温かい個人的情愛欲求」や「エロスの欲求」への関心や欲求が強く、被虐待児童には母性的欲求を求める心情を示す者が多いことを意味していると考えられる。

また実験的補償像(EKP=Experimentelle Komplement profil: 以下、背景像という)では、表3で見るように h + 反応が多く(約35.3%)出現しており、前景像における h + 反応と同様に、個人的な情愛欲求が、背景像でも多く示されやすいことを示している。つまり前景像、背景像を問わずに、被虐待児童では個人的な情愛欲求が出現しやすいことを意味していると考えられる。またついで h 0 反応も多く(25%)出現しており、これは被虐待児童にエロスの欲求が減退しやすい危険性も同時に出現する状況にあることを示していると考えられる。

なお背景像に関する一般群については、文献がなく研究は皆無の状況のため対比して論じることができないのは残念なことである。

### s 因子の反応

s 因子では、s - (33.8%)・s + (32.4%) 反応の2つが出現率30%を越えている(表4)。そして s 0 因子がそれに続く(約22.1%)。s 因子は男性性・父性的を象徴し、系統発生的には動物界における「強奪・掠奪性、攻撃的欲求」にさかのぼるとさ

れる衝動欲求である。s - 反応は攻撃性を内に抑圧しているという意味もあり、したがって一義的に s - 反応の多発傾向は、被虐待児童には怠惰で積極性のない消極的な態度を示す者が多いことやマゾヒズム、つまり受け身で怠惰な、被虐待傾向を示す者が多いことを示している。

表3  
背景像の h 因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

h 因子	反応数	出現率
h +	24	<b>35.29</b>
h -	13	19.12
h 0	17	<b>25.00</b>
h φ	9	13.24
h ±	5	7.35
総数	68	1%以上で有意

表4  
前景像の s 因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

s 因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
s +	22	<b>32.35</b>	<b>45.5</b>
s -	23	<b>33.82</b>	<b>23.9</b>
s 0	15	<b>22.06</b>	19.7
s ±	8	11.76	11.0
総数	68	5%以上で有意	

次に出現の多いs+反応は、積極的、活動的、意欲的であり、攻撃的でサディステックな要素の反応型である。この結果、被虐待児童の多くは、攻撃的で粗野な心情があることを意味している。この結果、被虐待児童にはs-とs+の示すサド・マゾヒズム的な両極の要素を持つ心情を示しやすいことを意味している。またその次に被虐待児童に得られやすいs因子として出現しているのが、s0反応である。s0反応はエネルギーの低下を意味し、活動力を失って疲労・低迷している状況にあることを示唆している。

一方一般群でのs因子の30%以上の最多発反応はs+反応(約46%)であるが、s-反応(約24%)も比較的多い出現傾向であり、一般群も被虐待児童群とほとんど大差のない傾向にあることがわかる。

背景像では30%を超える多発反応はないもののs+反応が最も多く(約28%)出現しており、粗野で攻撃性を有するものが多いことを意味している(表5)。そして次いで、sφ反応が約26%と多発傾向を示している。これは前景像においてs因子図版を多く選択した結果、背景像に因子が残留していなかったことを意味している。つまり前景像での図版選択が多く、それだけ前景における衝動の高まりが強かったことを示唆していると考えられる。更にはs-反応も続いており(約22%)、前景像での結果と同様にサディステックな傾向とマゾヒステックな傾向を持ち合わせていることを意味している。

表5  
背景像のs因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

s因子	反応数	出現率
s+	19	27.94
s-	15	<b>22.06</b>
s0	8	11.76
sφ	18	<b>26.47</b>
s±	8	11.76
総数	68	10%以上で有意傾向

### S衝動像の反応

二つの因子を統合する衝動像での出現の特徴を検討する場合は、因子反応と違って16種を基礎としていることから出現率10%以上出現する反応を多発反応として、その特徴として中心的に整理してみた。

被虐待児童の反応でh因子とs因子を組み合わせたS衝動像では、S+-・S++・S+0・S+±の4つの衝動像が出現率10%以上であった(表6)。S+-衝動像は「おとなしさ、受動性、消極性」を示すもので、「周囲への控えめで、受動的にかかわる傾向」を意味している。またS++衝動像は「積極的、活動的、意欲的」を示すもので、「活動性があり、積極的にかかわりを求めてゆく反面、時には抑制を欠いて攻撃的となったり、軽佻な傾向となって現れたりする」ことを示している。S+0衝動像は、「幼稚、子どもっぽさ、単純」な人格を示すもので、「人への接触を求める人懐っこさ、対人的な温かさを求める」心情を意味している。またS+±衝動像は、「情緒の動揺、抑制欠如、怒りっぽさ」を示しており、「感情の統制が図りにくく、一時の感情に流されて、衝動的な行為に走る危険性がある」ことを意味している。この衝動像は、幼児期からの情緒が不安定であったことを意味しており、親からの体罰を受

表6  
衝動像の出現率と一般群・非行群との比較

S 衝動 反応型	前景像		一般群(1,450人) の平均出現率	非行群(奥野1999)		被虐待児童と非行 群の有意差検定
	反応数	出現率		出現数	出現率%	
++	13	19.12	20.75	21	7.58	**
+-	14	20.59	24.90	77	27.80	
+±	7	10.29	8.60	44	15.88	
+0	13	19.12	12.15	14	5.05	**
-+	3	4.41	3.50	13	4.69	
--	2	2.94	4.05	13	4.69	
-±	0	0.00	1.22	8	2.89	
-0	2	2.94	1.25	7	2.53	
±+	3	4.41	2.90	6	2.17	
±-	1	1.47	3.70	17	6.14	
±±	1	1.47	1.32	9	3.25	
±0	0	0.00	2.85	4	1.44	
0+	3	4.41	4.07	7	2.53	
0-	6	8.82	4.10	22	7.94	
0±	0	0.00	2.72	11	3.97	
00	0	0.00	2.32	4	1.44	
総数	68			277		

(注) ①太字は出現率10%以上 ②有意差検定はカイ2乗による：\*\*1%以上で有意 \*5%以上で有意  
けたことのある非行少年に、比較的多く出現しやすい衝動像である。こうした点から被虐待児童  
児童の特徴的な衝動像として、特徴ある結果と言える。一般群との比較においても、このS+±  
衝動像は、一般の未成年者を対象とした複数の一般群の平均出現率10%以下の頻度であるのに  
比較して、被虐待児童では10%以上の出現率を示している。  
このようにS+±像は、被虐待児童群にやや多く出現する  
傾向がある。

また背景像での検討では、S+-像やS+±像が背景像  
で出現率が10%以下であるほか、S00像では11%と、前  
背景像(2.3%)より高い出現率が認められている(表7)。  
これは「エネルギーが発散されやすく状態を意味し、その  
結果エネルギーが解放されて無気力な状況に陥っている」  
ことを示している。つまり被虐待児童では適切な心的エネ  
ルギーの処理が行われにくい傾向があることを意味してい  
る。

## 2. P(感情・発作)衝動の反応結果

### e 因子の反応

e 因子反応の出現率では、e-反応(約34%)におい  
て出現率30%以上、ついでe+反応(約28%)、e±反応

表7  
背景像の衝動像出現率  
(太字は出現率10%以上)

S 衝動 反応型	背景像	
	反応数	出現率
++	8	11.76
+-	3	4.41
+±	2	2.94
+0	11	16.18
-+	5	7.35
--	4	5.88
-±	0	0.00
-0	4	5.88
±+	0	0.00
±-	2	2.94
±±	0	0.00
±0	3	4.41
0+	6	8.82
0-	6	8.82
0±	6	8.82
00	8	11.76
総数	68	

(25%) も多く出現している (表8 参照)。

e-反応は、「悪意、憤怒、猜疑心、嫉妬、激情的」などの悪的感情を象徴している。こうした感情が存在していることを意味している。しかし同時に、その次にe+反応の出現も

多く認められ、「善、良心への欲求、慈悲、親切」を象徴しており、「親切、慈悲的、温情的、純真さ、寛容、敬虔的、良心的」であり、善良な人柄を意味している。つまりe-反応の逆の要素を持った心情を示しており、これらの傾向は被虐待児童には出現しやすい傾向があることを示している。またe±反応も多く出現している。これはe-反応とe+反応を併せ持った要素を意味しており、いわば「善と悪の葛藤状態」にあることを意味している。つまり直接的に感情をあらわにするのではなく、感情的葛藤として存在している状況の反映と考えられる反応である。

一般群では、e-反応、e+反応の出現率は被虐待児童と同様に多いが、被虐待児童と違っている点はe±反応よりも、e0反応の方が多く出現している点にある。e0反応は感情的葛藤(e±)としてではなく、感情が開放された状況(e0)にあることを示している。一般群には、研究毎に多少基礎的な集計方法に違いのあるものもあり、今回は特に統計的な有意差検定は敢えてしていないが、今回の調査で、被虐待児童には直接的な感情的開放・発散という形態をとらずに、より間接的な形である「感情的葛藤」として出現することが多いと考えられる。背景像の出現率は、ほぼ前景像と同様な状況にある(表9)。

表8

前景像のe因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

e 因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
e +	19	<b>27.94</b>	<b>24.7</b>
e -	23	<b>33.82</b>	<b>32.1</b>
e 0	9	13.24	<b>23.6</b>
e ±	17	<b>25.00</b>	19.7
総数	68		

表9

背景像のe因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

e 因子	反応数	出現率
e +	14	<b>20.59</b>
e -	27	<b>39.71</b>
e 0	5	7.35
e φ	13	19.12
e ±	9	13.24
総数	68	1%以上で有意

### hy 因子の反応

hy 因子では、hy-反応 (約46%) 及び、hy0 (約24%) 反応が多く出現している (表10)。hy 因子は、「自己顕示」を象徴する因子である。そしてhy-反応は「自己隠べい傾向、羞恥、臆病、空想・虚言傾向、逃避

表10

前景像のhy因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

hy 因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
hy +	12	17.65	10.0
hy -	31	<b>45.59</b>	<b>58.3</b>
hy 0	16	<b>23.53</b>	17.4
hy ±	9	13.24	14.3
総数	68	1%以上で有意	

傾向、非現実傾向」を意味しており、被虐待児童ではこうした傾向があることを示している。またhy0反応は、自己が隠べいされることなく表出された状態であることが示されている。

羞恥もなく、現在の状態を外界に対して表出されている状況を示している。被虐待児童にはこのような、周囲へ顕示(主張)をすることを必要としている者が多いと考えられる。一般群との比較においても、一般群ではhy 0 因子の出現率は20%以下であるなど、出現率には相違があることも上記の点を示唆する結果である。

背景像での検討では、前景像ではさほど多くないhy + 因子に約30%の出現があり、自己の状況について周囲の注目を得たいという顕示的欲求が認められる傾向がある(表11)。

表11  
背景像のhy 因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

hy 因子	反応数	出現率
hy +	20	<b>29.41</b>
hy -	20	<b>29.41</b>
hy 0	12	17.65
hy φ	6	8.82
hy ±	10	14.71
総数	68	5%以上で有意

### P 衝動像の反応

今回の調査で多く出現しているのは、P +- 像(約18%)、P -- 像(約12%)、P - 0 像(約12%)である(表12)。

表12  
衝動像の出現率と一般群・非行群との比較

P 衝動 反応型	前景像		一般群の平均 出現率	非行群(奥野1999)		被虐待児童と非行 群の有意差検定
	反応数	出現数		出現率	出現率	
++	3	4.41	2.35	5	1.81	
+-	12	<b>17.65</b>	<b>19.30</b>	30	<b>10.83</b>	
+±	1	1.47	3.12	8	2.89	
+0	3	4.41	6.02	17	6.14	
-+	6	8.82	2.45	14	5.05	
--	8	<b>11.76</b>	<b>14.15</b>	39	<b>14.08</b>	
-±	1	1.47	2.90	10	3.61	
-0	8	<b>11.76</b>	4.77	32	<b>11.55</b>	
±+	1	1.47	2.12	9	3.25	
±-	5	7.35	<b>13.37</b>	19	6.86	
±±	6	8.82	2.27	4	1.44	<b>**</b>
±0	5	7.35	4.82	11	3.97	
0+	2	2.94	2.00	2	0.72	
0-	6	8.82	<b>13.85</b>	42	<b>15.16</b>	
0±	1	1.47	3.30	10	3.61	
00	0	0.00	3.82	25	9.03	<b>*</b>
総数	68			277		

(注) ①太字は出現率10%以上 ②有意差検定はカイ2乗による：\*\*1%以上で有意 \*5%以上で有意

P +- 像は「善人アベルの像」であり、「小心・おとなしい・抑制的」傾向を意味している。被虐待児童が示しやすい、ひとつの傾向として、周囲の反感を受けないように自己抑制しておとなしくしている状況が考えられる。P +- 像はまた、些細なことで、傷つきやすい要素やよくよと悩みやすい要素もあり、被虐待児童にはこうした反応像が出現しやすいことを示している。

またP -- 像は、「不安・防衛・感情閉鎖的」傾向を意味し、外見上は何でもないようだが、



内面には不安を生じている、「内面のパニック」反応である。被虐待児童にはこうした反応像が出現しやすいことから、特段に外見上は目立った問題状況は無いようだが、実は見えないところで強い不安が隠されている可能性を示唆している。

P-0像は、「不安・粗野・怒りの抑圧」を意味し、内に激しい感情を秘めて、そのために気分が動揺しやすく、時にはアクティング・アウトして粗野な行動に走ったりする危険性があることを示唆しており、被虐待児童はこうした危機的状况に陥りやすいことを示している。

一般群との比較では、このP-0像が一般群では出現が少ない(約5%)ことから、内面に強い粗野な感情を秘めている傾向が、一層明らかであることが理解される。

また背景像での検討では、P00像に約12%と多く出現している。この像は「感情爆発・興奮状態・感情混乱」を意味しており、被虐待児童の抑圧された背景像においては、こうした統制の利かない感情状態があることを示している(表13)。

表13  
背景像の衝動像出現率  
(太字は出現率10%以上)

P衝動	背景像	
反応型	反応数	出現率
++	5	7.35
+ -	5	7.35
+ ±	3	4.41
+ 0	1	1.47
- +	8	<b>11.76</b>
- -	13	<b>19.12</b>
- ±	4	5.88
- 0	5	7.35
± +	2	2.94
± -	2	2.94
± ±	1	1.47
± 0	4	5.88
0 +	5	7.35
0 -	0	0.00
0 ±	2	2.94
0 0	8	<b>11.76</b>
総数	68	

### 3. Sch (自我) 衝動の反応結果

#### k 因子の反応

k 因子では、k-反応が最も多く(約59%)、ついでk0反応(約24%)となっている(表14)。k 因子は、「所有

表14  
前景像のk 因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

k 因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
k +	6	8.82	12.1
k -	40	<b>58.82</b>	<b>52.0</b>
k 0	16	<b>23.53</b>	17.9
k ±	6	8.82	18.4
総数	68	1%以上で有意	

欲求・物質化欲求」に関わる因子であり、k-反応は、自我収縮的であり抑制的・現実適応的で、時には過適応的で無理をして自己を否定的に抑制する傾向を示している。被虐待児童には、このような心的状況になりやすいタイプの者が多いことを示している。

またk0反応は、事象を内に取り込み、精神的要素ではなく物質的要素として同化する心的機制があることを意味しており、被虐待児童にこうした反応が比較的多いことは、いわば情愛といった精神的要素を形のある物質的要素として、つまり「愛情の代替として金銭や玩具を求める」といった構図で示されるような状況の者が、比較的多いことを意味していると考えられる。一般群との比較では、このk0反応は一般群では20%以下であることから、このk0反応も被虐待児童の特徴のひとつかと思われる。

一方背景像では、前景像と同様にk-反応が多発(約41%)し、自己抑制して現実的な適応

を図っている成熟した姿での反応型を示し、次いでk + 反応型を多く(約27%)出現させている(表15)。これは自我状態の物質化を図る欲求の結果、自我収縮(k +)を生じて自分の殻に閉じこもりやすい要素にあることを意味している。

#### p 因子の反応

p 因子では、p 0 反応(約34%)、p + 反応(約31%)、p - 反応(約27%)の3つが高い数値を示している(表16)。p 因子は、「存在欲求・精神化欲求」に関わる因子であり、自我拡大傾向や外向的傾向を示して

いる。被虐待児童にp 0 反応が出現しやすいことは、こうした自我拡大欲求があることを示唆している。

またp + 反応は、「自我肥大・権威的・支配的」欲求があることを意味している。被虐待児童にこうした自我を拡大しようとし、周囲を支配的になりたいという欲求があることを示唆している。これはp 0 反応とp + 反応の二つは、いわば周囲の状況判断が自己中心的なおとな気ないもので児童期には出現しやすい傾向がある反応型である。したがって先行研究における一般群でも、今回の被虐待児童の結果とほぼ同様に出現しやすい傾向があり、特に被虐待児童の特徴というわけではない。

次いでその逆のp - 反応が被虐待児童にも一般群にも出現しやすい反応として得られている。この反応は、自我の「過敏さ・繊細さ」を意味しており、感じやすいために被害感情や不信感を持ちやすい傾向があることを示している。つまり被虐待児童には自我肥大を生じやすい者が多い反面、過敏で傷つきやすい傾向を示す者も多いことを示している。

こうした反応傾向は、被虐待児童にのみの特徴的な傾向とはいえ、一般群とほぼ同様な状況にあることを示している。

一方背景像においても、このp - 反応は約41%と最多の出現率が得られている。なお付記すれば、背景像k・p 因子合わせて10個の反応中、k - 反応とp - 反応が共に同率(約41%)で最多の出現率となっている(表17)。これは自己防衛を示す反応である。この点が今回の調査でわかった被虐待児童の特徴の一つであり、その他p 因子では被虐待児童に特徴的な反応は得られていない。

表15  
背景像のk 因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

k 因子	反応数	出現率
k +	18	<b>26.47</b>
k -	28	<b>41.18</b>
k 0	7	10.29
k φ	4	5.88
k ±	11	16.18
総数	68	1%以上で有意

表16  
前景像のp 因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

p 因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
p +	21	<b>30.88</b>	<b>25.5</b>
p -	18	<b>26.47</b>	<b>36.8</b>
p 0	23	<b>33.82</b>	<b>27.1</b>
p ±	6	8.82	9.7
総数	68	5%以上で有意	

表17  
背景像のp 因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

p 因子	反応数	出現率
p +	23	<b>33.82</b>
p -	28	<b>41.18</b>
p 0	5	7.35
p φ	3	4.41
p ±	9	13.24
総数	68	1%以上で有意

Sch 衝動の反応

k と p, この二つの因子を統合する衝動像ではどのような結果が得られたのかを示しているのが表18である。ここでは Sch - + 像 (約21%), Sch - 0 像 (約19%), Sch - - 像 (約13%) の3つが多い反応型となっている。

表18  
衝動像の出現率と一般群・非行群との比較

Sch 衝動 反応型	前景像		一般群の平均 出現率	非行群 (奥野1999)		被虐待児童と の有意差検定
	反応数	出現率		出現数	出現率	
++	1	1.47	1.97	10	3.61	
+-	3	4.41	4.40	5	1.81	
+±	0	0.00	1.55	2	0.72	
+0	2	2.94	3.55	7	2.53	
-+	14	<b>20.59</b>	<b>15.92</b>	81	<b>29.24</b>	
--	9	<b>13.24</b>	<b>16.70</b>	17	6.14	*
-±	4	5.88	7.10	23	8.30	
-0	13	<b>19.12</b>	<b>15.20</b>	44	<b>15.88</b>	
±+	2	2.94	4.95	14	5.05	
±-	2	2.94	6.60	5	1.81	
±±	0	0.00	2.50	8	2.89	
±0	2	2.94	5.50	9	3.25	
0+	4	5.88	4.00	24	8.66	
0-	4	5.88	4.30	11	3.97	
0±	2	2.94	2.15	5	1.81	
00	6	8.82	4.12	12	4.33	
総数	68			277		

(注) ①太字は出現率10%以上 ②有意差検定はカイ2乗による：\* 5%以上で有意

Sch - + 像は、「抑制的・適応的・現実的」を意味しており、小心でおとなしい人柄や目立たず周囲に適応的な人柄を意味している。時には適応が優先されて緊張や不安が生じることもある像である。また Sch - 0 像は、「心気傾向・緊張・抑制的」を意味しており、自己を抑制して適応的になろうと我慢するが、内面の不安を強めたり、緊張したりしやすい傾向を持っている。次いで Sch - - 像は、「現実的・順応的・非主体的」を意味しており、周囲への配慮は働くが、自信に欠け、傷つきやすいことを示している。

背景像との比較では、Sch - - 像が最も多く (約24%) 出現しており、前景像と同様に、自己抑制して現実への適応を図ろうとする自己防衛的傾向を持つ被虐待児童が多いことを意味している (表19)。また Sch - - 像とは意味的には逆の反応像である Sch ++ 像、すなわち「完全自己愛」と名づけられた自己への陶醉傾向を持つ自己中心的な万能

表19  
背景像の衝動像出現率  
(太字は出現率10%以上)

Sch 衝動 反応型	背景像	
	反応数	出現率
++	9	<b>13.24</b>
+-	5	7.35
+±	2	2.94
+0	2	2.94
-+	6	8.82
--	16	<b>23.53</b>
-±	5	7.35
-0	1	1.47
±+	3	4.41
±-	5	7.35
±±	0	0.00
±0	3	4.41
0+	5	7.35
0-	2	2.94
0±	2	2.94
00	2	2.94
総数	68	

感に支配された状況を持つ者も多い(約13%)ことを示している。

このようにSch像では、自己抑制的で、周囲との調和に気を配っており、順応的であるが傷つきやすい傾向を示す者が多いことを示しているが、こうした傾向は一般群との結果を照らし合わせてみると、一般群でも同様な傾向を示していて、被虐待児童にのみ特徴的傾向とは言えない結果である。

#### 4. C (接触) 衝動の反応結果

##### d 因子の反応

反応因子では、d 0 反応 (約46%)、d - 反応 (約28%)、d + 反応 (25%) の3つが多発傾向を示している (表20)。d 因子は、「獲得・保持・探求」を意味しており、d 0 反応は新しい対象を探求し獲得してしまっているか、

若しくはこの探求欲求が乏しい事態にあることを示唆している。またd - 反応は、「変化を求めず、一旦得られた対象を離さないようにしがみつく傾向」を意味している。d + 反応は、「新しい対象を求めて、探求する」傾向を意味し、探求欲求のために心情的安定性きやすい状況にあることを示し、時には抑うつ気分になりやすい要素があることを示唆している反応である。つまり、こうした傾向を被虐待児童は示しやすいことを示している。d 0 反応とd + 反応は共に、一般群でも出現率35%以上の高率を示しており、今回調査の被虐待児童にのみ特徴的な反応とは言えないが、d - 反応は一般群では20%以下の低率で、今回被虐待児童調査で得られた約28%に近い出現率とは大きな差が見られる。すなわちd - 反応、つまり変化を求めずに一旦得られた対象を離さないようにしがみつく傾向が、被虐待児童には出現しやすいことがあることを示している。

背景像ではd + 反応が最も多く(約38%)、新しい対象を求めての探求心があるが抑うつ傾向を持ちやすい者が多いことを意味している (表21)。また一方d - 反応を示す者も多く (約32%)、獲得したものを離そうとせず、変化を拒む傾向を持つ者も多いことを示している。これらは前景像での出現状況と同様な傾向である。前景像と異なるのはd ± 反応の出現率 (約24%) である。d ± 反応は、「探求における躊躇状態や葛藤」を意味しており、スムーズな状況への対応が取りにくい傾向を示している。被虐待児童の中には、このd ± 反応が意味するようにスムーズな対応が取りにくい者が少なからずいることを示している。

表20  
前景像の d 因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

p 因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
d +	17	<b>25.00</b>	<b>35.0</b>
d -	19	<b>27.94</b>	18.7
d 0	31	<b>45.59</b>	<b>40.5</b>
d ±	1	1.47	5.7
総数	68	1%以上で有意	

表21  
背景像の d 因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

d 因子	反応数	出現率
d +	26	<b>38.24</b>
d -	22	<b>32.35</b>
d 0	2	2.94
d φ	2	2.94
d ±	16	<b>23.53</b>
総数	68	1%以上で有意

m因子の反応

m因子では、m-反応 (約32%)、m+反応 (約31%)、m±反応 (約22%) の3つが高い出現率を示している (表22)。m因子は、「固執、古い情愛対象への固着」という意味を持っているが、m-反応は、「一旦獲得した

表22  
前景像のm因子反応出現率 (太字は出現率20%以上)

m因子	反応数	被虐待児 (%)	一般群 (%)
m+	21	<b>30.88</b>	<b>24.1</b>
m-	22	<b>32.35</b>	<b>45.1</b>
m0	10	14.71	<b>20.5</b>
m±	15	<b>22.06</b>	10.3
総数	68		

対象から離反し、孤立する」傾向を示し、m+反応は逆に、「一旦獲得した対象に執着し、依存する」傾向を意味している。ついでm±反応は、「執着・依存する対象についての態度や志向が定まらない不安定性」を意味していると考えられる。単純に依存することができない葛藤状態であることを示唆している。一般群との比較では、m-反応やm+反応は同様に20%以上の高い出現率を示しているが、m±反応については、一般群では他の反応より少なく (約10%)、被虐待児童には多く (約22%) 出現している。これは被虐待児童が情愛関係における依存と離反の拮抗する状況を反映し、態度を決めにくい、安定のない情愛関係の中で生きていることを示唆していると考えられる。特に筆者の経験からはm±反応は、対人関係における微妙な心の動きを背景に持ち、単純に甘えたり依存してゆかない比較的早熟な傾向を持つタイプの人間であり、両親への批判的で冷静な態度を持つ者に出現しやすいことがあり、Szondiもこの反応について、「両親のどちらにも満足を持ってない不幸な状況」と述べている。

背景像との比較では、前景像の衝動像の出現率傾向を類似した反応を示している。ただmφ反応が20%を越える数値を示し (表23)、前景像でm因子選択が多くなされていること、つまりそれだけm因子における反応出現が多い状況下であり、緊張や開放が活発であることを意味している。

表23  
背景像のm因子反応出現率  
(太字は出現率20%以上)

m因子	反応数	出現率
m+	21	<b>30.88</b>
m-	17	<b>25.00</b>
m0	13	19.12
mφ	14	<b>20.59</b>
m±	3	4.41
総数	68	5%以上で有意

C衝動像の反応

d因子とm因子を統合したC衝動像では、C0+像 (約16%)、C0-像 (約15%)、C+-像 (約10%)、C-+像 (約10%)、C0±像 (約10%) の5つが出現率10%を超えている (表24)。

C0+像は、「甘え・依存・口唇愛傾向」を示しており、「母性への情愛依存」や「一旦獲得した情愛対象に執着・依存する」傾向を意味している。またC0-像はC0+像と逆に、「情愛対象から離脱した不安的な状態」を意味し、孤立しやすく、現実から遊離した、不安定な状態にあることを示している。C+-像もこのC0-像と同方向の「遊離・孤立」の意味を持っており、特にC+-像は抑うつ的要素を有し、気分が低迷している状態であることを示唆し

表24  
衝動像の出現率と一般群・非行群との比較

C衝動 反応型	前景像		一般群の平均 出現率	非行群 (奥野1999)		被虐待児童と非行 群の有意差検定
	反応数	出現率		出現数	出現率	
++	3	4.41	11.22	18	6.50	
+ -	7	10.29	10.32	5	1.81	**
+ ±	6	8.82	3.00	5	1.81	*
+ 0	1	1.47	6.85	5	1.81	
- +	7	10.29	9.90	74	26.71	**
- -	5	7.35	3.80	7	2.53	
- ±	2	2.94	2.02	14	5.05	
- 0	5	7.35	4.50	14	5.05	
± +	0	0.00	2.67	8	2.89	
± -	0	0.00	1.97	2	0.72	
± ±	0	0.00	0.97	2	0.72	
± 0	1	1.47	1.80	2	0.72	
0 +	11	16.18	18.45	85	30.69	*
0 -	10	14.71	8.25	8	2.89	**
0 ±	7	10.29	5.62	14	5.05	
0 0	3	4.41	8.25	14	5.05	
総数	68			277		

(注) ①太字は出現率10%以上 ②有意差検定はカイ2乗による：\*\*1%以上で有意 \*5%以上で有意  
ている。C - + 像は、C 0 + 像と同方向の状況を示しており、C + - 像とは逆のベクトルに  
あって、情愛対象に依存し固着しようとする欲求を示している。C 0 ± は、「落ち着きのなさ、  
苛立ち、不幸福感」を示しており、「周囲の誰にも十分な満足感を得られない不幸な気分」で  
あり、「人間関係の不安定さを反映」している像である。このC 0 ± 像は今回の調査では、被虐  
待児童に出現しやすい他の4つの像 (C 0 + 像とC 0 - 像、C + - 像とC - + 像) が+ 反応  
意味と- 反応意味とに相反し拮抗する状況をひとまとめにした状態を示しており、被虐待児  
童の定まりにくい不安定な心情を雄弁に物語る象徴的な反応像として考えられる。

一般群との対比では、C - + 像、C 0 - 像、C 0 ± 像は、被虐待児童に出現しやすい像と  
なっており、先に述べたような「依存と離反」、「人間関係の葛藤」といった情愛構造が生じや  
すい状況を反映していると考えられる。またC ++ 像は一般群に多く (約11%)、被虐待児  
童には少ない (約4%) のは、被虐待児童群よりも一般群は、不安定ではあるが、柔軟な対応が  
可能なのに比べて、被虐待児童群では、「落ち着きのない不安定さを反映した抑うつ気分が支  
配的な、親から満足を得にくい不満感・不幸福感がある」(C 0 ± 像) といった暗い気分が反映  
された人間模様が見られるのが特徴である。

また背景像では、C + - 像やC - + 像の多発傾向は前景像と同様であるが、独自にC + 0 像  
とC ± 0 像に多発傾向が認められる (表25)。C + 0 像は、「不機嫌・移り気・抑うつ」を意味  
する反応である。新たな対象を求める探求欲求を持つが、一方で安定を欠きやすい状況と気分  
低迷の危険性を持っている反応である。またC ± 0 像は、「不安が潜んでおり、生き方に対す  
る懐疑心が隠されていることを示している。積極的な対応ができずに気分が低迷しやすく、抑

うつ状態になりやすい傾向」を意味している。被虐待児童には、探求や依存の比較的明確な欲求を示す者もいるが、抑うつ傾向を示す者や葛藤状態にあって積極的な対応がでにくいものを背後に持つ者が多いことを示している。

さて(下)では、こうしたソンディ・テストの反応が、具体的にどのような事例を通して出現しているのかを明らかにしたい。実際の事例に接すれば、家庭を包括する社会がいかに深い問題を持ち、その危機状況にあるかが明白である。またこうした事例の治療的対応を具体的に考えてゆく際にはソンディ・テストのテスト学的知見が欠かせないことが理解されるであろう。

[注]

一般群については、大塚義孝(1993)が過去の研究の結果をまとめているので、それを参考にした。大塚がまとめたのは13歳から60歳までの日米欧の7人によるソンディ研究者の反応発現の一覧である。その中の今回の対象年齢に該当する13歳から20歳までの1,450人の正常人反応頻度を「一般群」として比較した。本論以下のところで「一般群」としているのは、すべてこの資料のことを言う。

詳しく述べると Szondi.L. (1947) 500人, アメリカの Coulter,W.M. (1959) 600人, 佐々木隆三 (1962) 300人, 市村潤 (1964) 50人である。ただ統計的な比較調査については、施行年次に大きな違いがあることは勿論のこと、各国に渡る被検者であることから、有意差検定などの統計処理に当たっては、種々細部の検討の必要性があると判断して今回は、統計的処理は行わずに単純な比較検討のみを行った。

[参考文献]

Coulter,W.M. (1959) The Szondi test and the prediction of antisocial behavior.J.proj.tech.23.24-29  
 犯罪白書(平成17年版)(2005). 国立印刷局  
 市村潤 (1964)「非行少年に適用したソンディ・テスト」. 家裁月報. 17.3.114-132  
 日本経済新聞(平成18年8月4日朝刊). 日本経済新聞社  
 奥野哲也(2006)「ソンディ・テスト」. 創元社『心理査定実践ハンドブック』. 294-298  
 奥野哲也(2006)「強制わいせつをくり返した少年の心理査定」. 創元社『心理査定実践ハンドブック』. 179-183  
 奥野哲也(2006)「選択の論理-犯罪・非行防止の一視点」. 『佛教大学教育学部学会紀要』9. 71-77  
 奥野哲也(2005)「ソンディ・テスト」. 至文堂『臨床心理学入門事典』現代のエスプリ別冊. 87-88  
 奥野哲也(2004)(監修)『ソンディ・テスト入門』ナカニシヤ出版  
 奥野哲也(2002)「非行の凶悪化とソンディ・テスト所見」. 佛教大学臨床心理研究センター『臨床心理学研究紀要』第6・7号. 41-53  
 奥野哲也(1998)「少年の非行:凶悪化の病理」. 至文堂『心の病理学』現代のエスプリ別冊. 213-226  
 奥野哲也(1990)「ソンディ・テストの非行臨床における効用と限界」. 至文堂『運命分析-その臨床とソ

表25  
背景像の衝動像出現率  
(太字は出現率10%以上)

C衝動 反応型	背景像	
	反応数	出現率
++	5	7.35
+ -	10	14.71
+ ±	0	0.00
+ 0	11	16.18
- +	12	17.65
--	4	5.88
- ±	2	2.94
- 0	4	5.88
± +	4	5.88
± -	2	2.94
± ±	0	0.00
± 0	10	14.71
0 +	0	0.00
0 -	1	1.47
0 ±	1	1.47
0 0	2	2.94
総数	68	

「被虐待児童の衝動分析と治療的対応について」(上) (奥野哲也)

ディ』現代のエスプリ273. 135-154

大塚義孝 (1993) 『衝動病理学-増補』誠信書房

Sasaki.R. (1962) Typological study on drive structure of juvenile delinquents.Szondiana III .153-166

Szondi.L. (1952) Triebpathologie. Hans Huber.

Szondi.L. (1947) Experimentelle Triebdiagnostik.Hans Huber. (佐竹隆三訳 (1969) 『実験衝動診断法』.  
日本出版貿易)

〔付記〕

本研究は、平成17年度佛教大学特別研究助成による研究成果の一部であることを付記する。

(おくの てつや 臨床心理学科)

2006年10月19日受理